

## 説経『をくり』の離陸

— 「引く物語」は何を語るか —

瀬田 勝 哉

### はじめに

妻照手の父横山によって毒殺された小栗は、閻魔大王の裁きにより娑婆に送り返される。相模国藤沢に近い墓場からこの世に姿を現した小栗は、藤沢の御上人によって餓鬼阿弥陀仏と名づけられ、紀州熊野本宮湯の峯をめざしてよみがえりの旅に出る。餓鬼阿弥を乗せた土車を、人々は「えいさらえい」の掛け声で引いた。一方照手も殺されかかり、死はまぬがれたものの人買の手に渡り、売られ売られて美濃国青墓の宿に流れ着いた。常陸小萩と名を変え水仕として酷使される照手の前に、餓鬼阿弥の車が着く。夫小栗とも知らぬ照手は亡き夫の供養とばかり、五日の休みをもらい、近江国大津まで狂気の姿にもてなして餓鬼阿弥の車を引く。大津関寺で照手は後

ろ髪を引かれる思いで餓鬼阿弥と別れ、青墓に戻らねばならなかった。

青墓から大津までの照手の車引きは、この物語のクライマックスシーンである。広末保のことは借りると、説経『をくり』はさまざまな在地的伝説、伝承を底流にしながらも、一つの物語として「離陸」した<sup>①</sup>。離陸には、個々の伝説・伝承を組織し直すことのできる視点が必要であったという。広末は、小栗が持つ英雄に独特の異常な力「不調」をそれに充てたし、荒木繁は、早くから照手が示した女性の「愛と献身」にそれを見ていた<sup>②</sup>。これらがそれぞれに重要な視点であることはいうまでもない。

しかし忘れてならないのは、この物語の中にもちこまれた新しく太い柱、「車引き」ということである。この「引く物語」は、日本の文芸史上他に類例を見ない展開をもっている。視点というよりは仕掛けといったほうがふさわしいが、これなくしては、「をくり」の物語は離陸し得なかつただろう。そこで本稿では、車引きということに着目することで『をくり』の話からどんな問題が見えてくるのか、順次明らかにしていこうと思う。

その際に私がとった基本的姿勢は、説経の正本かそれに準ずると認められているもの、つまり文字として定着しているものにこだわるという点である。小栗の話には小栗伝説とか伝承といわれるものが各地に数多くあり、それを使つての研究も少なくない<sup>③</sup>。この伝説・伝承は離陸した説経『をくり』の親でもあり先祖であることもあるが、逆に離陸した『をくり』の子であり孫であり、末裔であるということも十分あり得る。このはなはだ流動的で「地をはうようにして伝播し、増殖していく」<sup>④</sup>伝説・伝承を史料批判的検討を加えることなく論のなかに滑り込ませることは、歴史的な時間の後先を見失わせかねない大きな危険をはらんでいる。実際そうなったと思える論も少なくない。だから本稿では、この魅力的だが危なくもあるものには意識的に近づかず、文字に定着した確実なものだけに頼って考察を

進めていこうと思う。そうすると、説経正本を収集し、翻刻し、さらに注釈を加えていった横山重、室木弥太郎、荒木繁という説経研究の基礎を築いた人たちの仕事の大きさに改めて出会うことになる。そしてかれらがすでに気づいていながら、実はそれに続く者たちが十分発展させて来なかった問題点にも気付かされることになるのである。何がわかっていて、何がわかっていないのか、単純だがそこを見定めていくことが大事だろう。

### 一 よみがえりの旅の起点

小栗が閻魔大王から送り返されてこの世に帰還した場所は相模国藤沢に近い上野が原で、発見して餓鬼阿弥陀仏と名付けたのが藤沢の御上人というのは、この物語に少しでもなじんだ者ならたいは知っている。現在活字になりもつとも流布している『絵巻をくり』(以下a)<sup>5</sup>ではそうになっているし、その他の正本といわれる説経の台本も藤沢の上人となっているからだ。

ところが、文字化されたものとしては現存するもので最も古いといわれる『古活字版をくり』(以下b)<sup>6</sup>と、それに極めて近いとされる『奈良絵本おくり』(以下c)ではそうはなっていない。「ふちさは」の「うはのかはら」(a)は「ふしさんのすそのうはのかはら」(b・c)に、「ふちさはのおしやうにん」(a)は「ふしさんのふもと一のみてし」「ふしさんのみてし」(b・c)になっている。つまりb・cでは、小栗は富士山の裾野あるいは麓の墓地から娑婆にもどり、これを発見し救出したのは「一の御弟子」「富士山の御弟子」という者であった。

紀州の熊野本宮湯の峯までよみがえりの旅をしようとする小栗(餓鬼阿弥陀仏)にとつて、旅の起点は、実はこのように奇妙に食い違っていた。もちろん、たいていの人は富士山は藤沢の崩れたものと判断して、b・cよりaに信

頼性をおくだろう。しかしことはそれほど簡単にすませられる問題ではない。bは何といても現存最古、寛永初年の正本ともいわれるものだからである。一体これはどう考えたらいいのか。まずはこのよみがえりの旅の起点を、場所と関わった人の面から確定する作業を始めなければならない。

両者の違いを理解するために、閻魔大王が小栗を託した相手（それは小栗を発見し救出した人物でもあるが）がどのように書かれているかを抜き出して比較し検討してみよう。

ちなみに比較するのは次の通り（表記および成立・刊行年はほぼ『説経正本集』に従う）

- a 絵巻をくり（寛永年間）
- b 古活字版丹緑本をくり（寛永初）
- c 奈良絵本おくり（近世初期）
- d 草子形おぐり物語（江戸鶴屋版 寛文末・延宝初）
- e 正本おぐり判官（延宝三）
- f 正本をくりの判官（佐渡七太夫豊孝本 正徳・享保頃）
- a ふちさはおしやうにんのめいたうひしりのいちのみてしにわたしもうす
- b （この部分は欠けているが、残存部の記述からしてcと同じと判断）
- c ふしさんのふもと一のみてしにおわたしあり
- d 藤さの上人参る
- e ふちさはおしやうにんのめいたうひしりのいちのみてしにわたしもうす

f 藤沢の上人へ参る

これを見ると、d、e、fはいずれも「藤沢の上人」とあり単純明快である。問題はaとb・cの違いにある。

b・cは一見簡単にみえる。閻魔大王が託したのは「富士山の麓の一の御弟子」「富士山の御弟子」という者に確定できるからだ。ただし誰の弟子かが分からないという問題がある。何も書かれていないから、閻魔大王の御弟子ということになるうか。

aは単純に藤沢の御上人としてしまいそうだが、実は複雑で簡単にはいかない。「めいたうひしり<sup>9</sup>」というものがわからない。しかもここにも「いちのみてしにわたしもうす」と出てくる。b・cの「一のみてしにおわたしあり」とほぼ同じ文言である。しかしはたして両者は同じ内容なのだろうか。

aを単純に読めば、閻魔大王は「藤沢の御上人（めいどう聖という名）の一番弟子である人物（一の御弟子）に小栗を託した」ということになるだろう。ところがaでは、この後「いちのみてし」という人物は全く姿を現さない。餓鬼阿弥陀仏と名付けるのも藤沢の御上人、土車を造るのも藤沢の御上人、引くのも藤沢の御上人である。閻魔大王から託されてよみがえりの旅に関わった者は藤沢の御上人以外ありえない。つまりこの読みでは大きな矛盾が生じてしまうのである。

厳然としてある矛盾を解決する読みは一つしかない。「いちのみてし」の「に」を、小栗を託す相手を示す「に」とみるのではなく、資格を表す助詞とみて「いちのみてしとして」と解し、小栗その人を「藤沢の御上人の一のみでし」にするというところで閻魔大王は小栗を娑婆に送り返したと解釈することである。託されたのは藤沢の御上人（めいどう聖）その人、「一のみてし」は小栗自身となる。そう考えれば、その後「いちのみてし」が現れないという矛

盾も消える。b・cのように閻魔が託す相手が「一のみてし」というのとは全く違う解釈になるのである。

このような解釈は、何も私人の新しい見解というわけではない。すでに室木弥太郎も気づいていた。新潮日本古典集成『説経集』の『をくり』の傍注に「として」と口語訳している。また荒木繁は直接この点には触れないものの、この部分でははつきりとb・cはaを簡略化したもの、形が崩れたものといっている。<sup>10)</sup>

いま荒木の指摘にも少し付け加えれば、b・cでは富士山からすぐに駿河の国なかに車を引き出してしまうことになる。そもそも小栗の物語は相模国が主要な舞台の一つである。常陸小栗が強引に婿入りするのは相模の横山。横山の娘が照手で、話もこの相模で展開する。馬の鬼鹿毛もここに登場し、小栗もここで毒殺される。照手も相模川に流され、人買いに売られる旅の起点も相模の六浦。よみがえった小栗が報復しようとした相手も相模の横山親子。このようにこの物語にとって最も重要な国相模をどう描くかは、非常に重要なはずである。娑婆に帰還した小栗が、相模抜きで富士山からそのまま駿河の国なかに引き出されたのでは、敵かたきの横山家中が餓鬼阿弥の小栗を相模驛で引くという皮肉な場面もなくなってしまい、話に緊張感が伴わない。b・cは相模という本来あるはずの重要な要素を完全に切り落としてしまっているのである。

もちろんこれが説経という生きた芸能でもあるのだろう。そもそも説経とは、可変性、流動性のあるもので、その時その場にふさわしく語られる以上、若干の変化は避けられない。だからb・cはまちがっているというわけではない。しかし余りに大きな改作である。ではこの出発点を富士山の裾野や麓とし、閻魔大王から託された人物を身分不明の「一の御弟子」として、相模国も藤沢上人も切り落としてしまうような改作の発想はどこから来たものだろうか。問題解決の手がかりは「一のみでし」という共通した言葉が両方にあることである。そもそもaのこの部分はわかりにくい文章である。「藤沢の御上人のめいどう聖の一の御弟子に渡し申す。」これでは音で聞いたとしても目で読ん

だとしても、スムーズには関係が頭に入ってこない。b・cの改作者は時期的にいつてもaの絵巻を見たわけではな  
いから、きつとaの基となったもの（これを『原をくり』と呼んでおく）に出会ったのだろうが、はなはだ理解しに  
くくわからなかったのではなからうか。そこで「一のみでしに」の意味を取り違えたまま、印象に残ったこの言葉だ  
けを残し、さらに藤沢を富士山に変えて話を組み立ててしまったのである。時間的にはa・b・cより後に来るd・  
e・fは、そうしたややこしさや誤解を避けるべく単純化を進め、「藤沢の上人」だけにしたのであろう。

このようにして確かめられたことはこうである。aの『絵巻をくり』の制作は寛永年間（一六二四～一六四四）、  
bの古活字版の成立は寛永初年（cはbを踏まえたもの）、故に、bが基にした『原をくり』（aの親でもある）は寛  
永初年より以前には成立していたということである。言い換えれば、『原をくり』が寛永以前にまず成立して、それ  
を忠実に踏まえたものがaの『絵巻をくり』、省略しつつ大幅に改作したのがbの『古活字版をくり』、それをまた写  
したものがcの『奈良絵本をくり』ということになる。この結論自体はこれまでの研究でも早くから言われているこ  
とであり、別段新しい見解でもなんでもない。<sup>12</sup> 藤沢と御上人といった、小栗よみがえりの旅の起点に関わる土地と人  
物に注目することで、同じ結論が出たというにとどまっている。

すでに寛永初年の時点では、説経『をくり』にも二つのタイプがあることが再確認できたが、その一つb・cは小  
栗帰還の場面で藤沢上人も相模国も切り捨ててしまっている。大胆に改作したことになるが、それでもこのタイプも  
何の支障もなくそれなりに聴かれ、読まれ享受されていたと思われる。そこで次には、どういう場でこのような改作  
がすすめられたのかを考えてみたい。

表1はaとb・c両タイプのそれぞれについて、小栗が娑婆に現れた場所から最後の熊野本宮湯の峯まで道行の地  
名を、国ごとに取り上げ比較したものである。進行の順序としては正しくない場合もあるが、手を加えず記載順に並

表 I

駿河	伊豆	相模	
藤枝 岡部 宇津の宿 鞠子の宿 今浅間 府内 江尻 清見寺 袖師が浦(してしが浦) 田子の入海 三保の松原 清見が関 吹上六本松 大宮浅間(富士浅間) 富士川 富士の裾野 吉原 浮島が原 三枚橋(沼津)	三島 山中三里 四つの辻	箱根 足柄 湯本の地藏 けはの橋 小田原せはい小路 おいその森 酒匂の宿 九日峠 相模原 上野が原	a 絵巻をくり
ふちのもりえた(藤枝)	富士山の裾野うはのかはら		c b 古活字版をくり 奈良絵本おくり
山城		近江	
山崎千軒 桂川 鳥羽恋塚 秋の山 四つ塚 東寺 栗田口		山科 関 大津 松本 馬場 石山寺 瀬田の唐橋 篠原 野路 草津の宿	a 絵巻をくり
山崎千軒 桂川 狐川 淀の橋 久我 こひたの川 秋の山 鳥羽恋塚 四つ塚 東寺 七条朱雀権現堂 花のみやこ 栗田口 日岡峠 十禅師 四の宮河原 山科		追分 関寺 大津 石山寺 瀬田の唐橋 篠原 野路 草津の宿 守山 野洲川 野洲の市場 なかはら(永原) あはらの宿	c b 古活字版をくり 奈良絵本おくり



説経『をくり』の離陸 瀬田勝哉

近江	美濃	尾張	三河	遠江	
鏡の宿 武佐の宿 高宮川原 寝物語 二本杉 長鏡	垂井の宿 青墓の宿 小態河原 杭瀬川 （尾張）	黒田 古渡 熱田の宮 うたう坂 （熱田大明神）	鳴海 頭護の地蔵 星が崎 熱田の宮 うたう坂 八橋 矢作の宿 赤坂 五井のこた橋 吉田今橋	潮見坂 今切 池田の宿 見付の郷 袋井驛 掛川 日坂峠 小夜の中山 菊川 大井川	島田の宿 大井川
鏡の宿（美濃・近江の境）	青墓の宿	熱田の宮	吉田 庄野の宿（カ）（伊勢）	うつの山（内山カ） 掛川 （日坂）	島田の宿

紀伊	和泉	摂津	
熊野本宮湯の峯 小松原 渡辺 南部 四十八坂 なか井坂 いとが峠 蕪坂 鹿背 仏坂 こんか坂	堺の浜 かむろの宿（橋本）	住吉四社大明神 堺の浦 大坂天王寺 三法師の渡り 天王寺 阿倍野 中島 太田の宿 芥川 広瀬	熊野本宮とつ川の湯、湯の峯 芥川 広瀬の川

- a 『絵巻をくり』の記載順に並べた。
- b 『古活字版をくり』 c 『奈良絵本おくり』は a の下に同地名を対応させたため、若干順序は入れかわっている。
- 原文の仮名を漢字に宛てたが『説経節』（東洋文庫）に従った。
- 地名について厳密な比定は行っていない。

べた。不明の地名も少なくないが、それも同様にそのまま載せた。

b・cは、娑婆に戻ってきた時点で相模国がないのはもちろんのこと、美濃以東の国の地名が極端に少ないことは一目瞭然である。各国ごとに一つか二つ、遠江国に至っては日坂（につさか）は正しくは駿河国内だし、庄野の宿に至っては伊勢国というように、地名が正確に把握できていない。ところが近江に入るや鏡の宿以降はaに勝るくらいに詳しくであり、山城・京に入る辺りは追分・山科、四宮河原・十禅師・日岡峠とさらに詳しく、説経『山椒大夫』にも出てくる七条朱雀権現堂を通り、淀周辺にも目を配っている。摂津から先はやや簡略になり、紀州になるとこれもまた極端に少なくなる。

こうしてみるとb・cの聴き手・読み手が近江・山城・京といった限られた地域のものであることはまちがいのないところだろう。この地の享受者にとっては、小栗なるものがどこの地で娑婆にもどってきたのか、よみがえりの旅の起点の詳細などは関心の外にあつた。とにかくあの世からもどる餓鬼阿弥陀仏と名付けられた異形の者が東の方から車に引かれてやってきたことが大事で、東といえはなんといつてもその代表は富士山である。小栗を発見しよみがえりの旅に送り出した人物が一の御弟子という身分不詳の者であっても別段何の支障もなかったのである。

説経のような語りの芸能では、現場感、臨場感、在地感といったことは、話し手と聴き手が一体感を持つ上では極めて重要なことである。「ああ、あそこだ、ここだ」といった身近な土地への共感でぐんぐん話の中に引きずり込まれていくからだ。b・cでは、小栗の話の主舞台の一つ相模国については、引き出す場所が無視されるだけでない。そもそも照手が相模川に流された場合も、流れ着いた場合も、人買いに売られる旅の始まりの六浦についても、無視するかあるいは混乱していて、地理感覚、現場感覚の欠如は顕著である。しかし京・近江辺りの者が享受者である限り、そんなことは全く支障にはならなかった。

一方、aの『絵巻をくり』では、相模国は丁寧に描かれる。照手が沈められた相模川の「おりからが淵」に始まり、流れ着いた「ゆきとせが浦」、人買い商人のいる「六浦が浦」までの川から海への行程も自然である。<sup>13</sup> また相模の丁寧さもそうだが、全体的にいっても東海道から熊野までの道行の地名に大きな偏りがない。和泉がほとんど出てこないのは不思議だが、全体的には小栗の旅は、道行の地名に沿って着実に続けられたのであろう。紀州における最後の坂の連続はこの旅の困難さをさらに際立たせるものといえようか。

以上から言えることは、aは相模国をはじめとして東国を書き、東国の者を享受者として想定しているといふことである。ことに相模国は主舞台として心が配られている。こんな場面もある。物語の由来を語り始めてすぐ小栗の両親を紹介するところで、「それ都に一の大匠、二の大匠、三に相模の左大臣、四位に少将、五位の藏人」などと突然相模を登場させている。単なる語呂合わせならば「讃岐」でも「佐渡」「薩摩」でもよさそうなのに「相模」を登場させるのは、聴き手、読み手として相模の者を強く意識したサービスピス精神からに違いない。

逆にb・cは京・山城・近江の享受者を予想したものであった。cの語りおさめのところ（bは欠けている）に、小栗・照手が今、神仏として祝われているというくだりがあるが、「みやこのきたの（北野）にみたう（御堂）をたて給ふて、いまの世にいたるまですえはんしやうと、いつきかしつき、おかみ申はかりなり」となっている。京都の北野社境内に祀られているというのだが、それはb・cがみやこ周辺の人々を対象としていたことを裏付けるものだろう。相模国も藤沢の御上人も切り落としてしまうような発想は、こうした説経享受の場の問題と密接に関わっていたのである。

二つのタイプを、小栗よみがえりの旅の起点というところから場と人に焦点をあてて見てきたが、aの『絵巻をくり』の元になった『原をくり』が、東国で生まれ主に東国で享受されたことは間違いないだろう。それがあまり時間を

おかずに京辺に持ち込まれ、改作されてbやcになったと考えられるのである。

## 二 藤沢の御上人は何をしたか

藤沢の御上人がいなくとも、帰還の地相模国がなくとも、小栗の話は享受された。しかしそれは京都周辺のこと、この物語が生まれた東国では藤沢の御上人も相模国も、話には必須の要素である。こうした具体があつてこそ、聴く者読む者の親近感、臨場感は満たされた。とはいえ、aの『絵巻をくり』（以下本稿では『をくり』と記す。これは『絵巻をくり』と『原をくり』が近似するものとの認識による。）においても、藤沢の御上人は何度も出てくるというものではなく、特別存在感が大きいようには見えない。律儀に報恩と復讐を忘れず行うのが説経の特徴だが、藤沢の御上人が後に報恩にあずかるということもないし、藤沢道場の清浄光寺が脚光を浴びるといふこともない。それでは、藤沢の御上人もまた、物語のあちこちに一時登場する周辺のな人物と同列の存在とみなしていいだろうか。

物語の中で、藤沢の御上人が登場する場所は小栗が娑婆に帰還した現場、藤沢の近く上野が原である。そこは真のよみがえりの地、紀州の熊野本宮湯の峯までの長い旅の起点であった。周知のように、熊野は時宗にとっては、始祖一遍が熊野権現から神託を受け阿弥陀如来への信心を確実にした最大の聖地である。そして湯の峯は、人を文字通り再生させる力のある聖なる湯として、時宗をはじめとして広く信仰を集めていたところである。一方藤沢は、遊行第四代上人呑海がここに道場（当初の名は清浄光院）を開き、後には遊行派最大の拠点（清浄光寺）として布教の要になった地である。<sup>15</sup> 藤沢と熊野本宮湯の峯は、時宗にとっては布教活動をする実社会の拠点と、信仰上の聖地という、際立ったシンボリックの二点である。小栗はその二点をつなぐパイプラインに沿って、始点から終点へとよみがえりの旅

をしていくわけである。物語のクライマックスともいふべき餓鬼阿弥と照手の再会、照手の車引き、二人の別れが繰り広げられる美濃国青墓宿から近江国大津関寺までの道行も、この線上での出来事である。

それでは、この道の起点である藤沢において、御上人は具体的に何をしたのだろうか

1 上野が原で小栗を発見する

小栗が姿を現した所は「小栗塚」ともいわれ、卒塔婆も立ち、群れの烏も啼いている墓地であった。上野が原については実際に現地を比定する研究もあるが、ここでは問題にしない。いわゆる埋墓であろう。横山の所で毒殺された人間が、どういうわけか距離的にも離れた藤沢近くの墓場から娑婆に帰還してくる。横山の屋敷は少なくともこの物語の本文からは相模川の中流域と感じられ、海に近くて相模川からもやや距離のある藤沢とはかなり距離があったはずである。不思議といえば不思議だが、実はこの娑婆への帰還の地は、物語の前半ですでに準備され暗に示唆されていた。照手が小栗の死を予見する不吉な夢を見たとき、「上野が原に卒塔婆が立つ」情景を見ていたからである。藤沢の御上人こそ夢の中には現れないが、御上人が上野が原で小栗を発見する伏線は早くから敷かれていたことになる。

2 餓鬼阿弥陀仏と名付ける

上野が原に現れた異様な姿を見て御上人はすぐに小栗と識別する。殺害した横山一門に知られないようにと髪を剃り、餓鬼阿弥陀仏と名付けた。頭を剃って坊主にするここといい、即座に阿弥号をつけることといい、これは自分の弟子にして、時衆にすることといえるだろう。話の流れからすると、閻魔大王の自筆の御判が据えられた胸札の字を読んだ後に御上人がそうすれば、「一のみでし」についても先のような誤解を生むことなくスムーズに理解されたのだろうか、本文では胸札を見る前に名付けを行ったことになっている。こうした矛盾はあるものの、

餓鬼阿弥陀仏の名付けは御上人が小栗を自分の弟子にしたことの証であり、旅する時衆の安全通行手形を与えたことにもなるわけである。

### 3 土車を作る

閻魔大王からの依頼は小栗を熊野本宮湯の峯の湯に入れてやってくれというものだった。これを実行するにははるかな道のりを移動していく車、当時の言葉でいえば「土車」がいる。御上人は早速この土車を作る作業にとりかからねばならなかった。

土車は元来は砂や土を載せて運ぶものだろうが、中世では障害者などもこれで移動したことが推測されている。有名な『一遍聖絵』では摂津天王寺の扉の外に乞食小屋がずらりと並んでいて、その中に四つの車輪を付けた小屋も数台描かれている。屋根がついていて土車とは言えないが、障害者のうちでも限られた者たちは、こうした車で移動していたことはまちがいない。<sup>17)</sup> どのくらいの距離を移動したのかはわからないが、自分だけでは動けない以上、引く人も必要だっただろう。そうした貴重な絵がほかならぬ『一遍聖絵』に描かれていることは、一遍や時衆の周辺にはこのような車で移動する人が日常的に見られたものであるうか。数少ない車の絵画資料の中には信濃の『善光寺参詣曼荼羅』があるが、これは覆いのない土車を子供らしきものが引いている。善光寺もまた時宗とは極めて関係の深い寺院であった。

土車を作るというような文献史料にはまだ出あっていないが、少なくとも時宗や遊行上人・藤沢上人と車、土車は歴史的にも密接な関わりを持つてることが絵画資料からわかっている。そうしたことから考えると、現実の社会でもかれらが車を作り、さらに改良を加えるなどの作業にも携わった可能性は十分ある。この小栗の物語で、藤沢の御上人が土車を作ることに何ら違和感を抱かずスムーズに作業に入っているというのも、そういう認識が

すでにできているからだろう。車という道具に綱がついていたことは当然である。ここでは女綱・男綱がつけられた。

#### 4 胸札に書き添えをする

帰還した小栗の胸には閻魔大王から御上人に宛てた文字が書かれていた。それに応えて小栗を熊野本宮湯の峯まで連れていくとしても、この遠距離を自分と門弟達だけで引いていくわけにはいかない。多くの一般の人の力を借りなければならぬ。そこで御上人は胸札に書き添えをして、人々に支援を呼びかけるのである。「この者を、一引き引いたは千僧供養、二引き引いたは万僧供養」、ひと引きすれば千人の僧でお経を読んで供養したことになります。二引きすれば万人の僧で供養したことになりますよ、それほど大きな供養につながる車引きです。さあさみなさん、というわけである。

この有名な文句がいつ、どこで発生したかはわからないが、説経『山椒大夫』でも、竹のこざりて首を引き落とすときの唱えごとにも使われており、すでに定着をみた親しみのある唱えごとであったようだ。引くことの功德を端的に教えるいわば施行のすすめでもあったのである。「施行車のことなれば」といういいかたをしている。ここからもわかるように、車引きは施行を引く行為の一つだった。

『をくり』の中で、胸札への書き込みは三人がする。一人目は閻魔大王、二人目は藤沢の御上人、そしてもう一人が照手である。閻魔大王は藤沢の御上人に宛て、照手は餓鬼阿弥陀仏に宛てた。いずれも個人一人に宛てている。それに対して藤沢の御上人の書き込みは、「一引きすれば千僧供養、二引きすれば万僧供養」というように、まさに万人に向けての呼びかけであった。だからそれは、目の前にある餓鬼阿弥の乗った車を引くという単純な行為への誘いにもなるし、さらにもっと大がかりな施行、つまり檀那として面倒をみるということへの誘いでもあつ

たのである。『をくり』では三か所に檀那が出てくる。「檀那がついて引くほどに」「車の檀那御覧じて」「車の檀那出で来ければ」<sup>(20)</sup>。傷んだ車を修理し、あるいは作り替え、餓鬼阿弥の世話をし、引き子の食事なども用意し、そうやって餓鬼阿弥の車は進んでいくのである。檀那がつかなくなったら車は止まってしまふ。美濃国青墓宿で車が放置され、それが結果として照手との再会につながったのは、こうした檀那の問題があった。

もちろんそんな檀那への呼びかけまで御上人が胸札に認めたということは物語本文には書かれていない。しかし人に車引きを勧め、小栗を実際にはるか遠くまで導いていくということはそういうことである。そういった仕組みを作ることが「一引きすれば千僧供養、二引きすれば万僧供養」の言葉の背後にはある。この長距離移動を可能にする仕組み、仕掛けを藤沢の御上人が作っているということを十分理解しておく必要があるだろう。

## 5 自ら引く

藤沢の御上人は餓鬼阿弥を上野が原から引き出した。自ら引いたのである。絵巻の詞書には簡単にしか出てこないが、絵になると、十六の場面にわたっていづれも総勢七人の僧が引つ張っている姿が描かれているようである。老僧一人に僧が四人、それに荷物を持つたり雑役にも従う下級の僧二人。この中の老僧が御上人である。相模原から小田原、湯本、足柄箱根を越えて三島、吉原と引き、富士川で水垢離をとって富士浅間を伏し拝み、ここで「さらばさらば」と餓鬼阿弥に別れを告げ、藤沢をさして帰るのである。<sup>(21)</sup>

この中で「エイサラエイ」と音頭をとっている。これは謡曲『百万』の中で「重くとも引けや えいさらえいと 一同に頼む 弥陀の力 頼めや頼め 南無阿弥陀仏」とかけ声をかけているのとよく似ている。『百万』の場合は人を乗せた土車ではなくもつと重いものを運ぶ車のようにだが、これらのかけ声にはともに阿弥陀信仰が底流にあり、意識の上でも共通性があるのかもしれない。



それでは中世の道をこなふうにして人々が車を引いていくという光景は実際にあったのだろうか。かつて私は、奥州衣川にあった弁慶石が京に帰りたいと声を発し、それを聞いた人々が協力して弁慶石を京に運んだという話を、史実と伝承の面から書いたことがある<sup>②</sup>。弁慶石はきつと輿にでも担がれてやってきたことと思われるが、その際、別の例として、神霊ののり移った牛が備州から車に乗せられ、人に引かれて京までやってきたという史実を紹介した。人間にせよ動物にせよ、あるいは石にせよ、神霊を負ったもの、異形のもの、そして障害者は、時と場を得れば人々に引かれ担がれて旅をしたのであった。説経『山椒大夫』でも、足の立たなくなった厨子王丸を七条朱雀権現堂から洛中へ、さらにその後摂津南北天王寺まで引いている。宿送り・村送りしたのである。これらのことは決して文学的空想力による虚構ではない。宿送り・村送りは深く社会に根付いた慣行だった。『をくり』でも、かたき小栗とも知らず、やむなく死なせてしまった（と思いきんでいる）照手の供養のために、横山家中の侍たちは「因果の車にすがりつき、五町ぎりこそ引かれける」と引いた。五町だけ引くとか十町引ととか、あるいは「一日の車道」などのように、人々は自分の都合と志に合わせて車を引いたのである。説経『をくり』はそうした社会的慣行を物語の中に取り入れた。しかもそれが十分機能していくような仕組みにして物語を大きく盛りあげたのだった。

以上1から5まで考察を加えたところからしても、藤沢の御上人は決して物語の折り返し地点で少し現れるといった小さな存在ではないことは明らかだろう。説経『をくり』の物語は、しばしば人や動物、つまり小栗や照手、あるいは鬼鹿毛という馬、深泥池の竜などに焦点が当てられ、そこに生まれる感情や情念、あるいは土葬・火葬、蘇りといった生死の問題に目が向けられてきた。文学や思想からすればそうしたことが問題になるのは至極当然である。し

かし忘れられてきたものがある。それは道具としての「車」であり、行為としての「引く」であり、それら全体を機能させていく「仕組み」のことである。こうした舞台や仕組みがあつてこそ人間の生死や恩愛の物語も躍動させることができる。そういう意味でも、私は土車と車引きをこの物語の「影の主役」と呼んでみたい。説経『をくり』を「引く物語」と称した所以である。そしてこの車引きというよみがえりの旅の仕組みを作った藤沢の御上人こそは、この物語の舞台を回す重要な仕掛け人の役割を負っていたとみるのである。

### 三 「物語」の離陸はどこで起きたか

広末保がいう「物語としての離陸」がいつ、どこで起きたか、それが次の検討課題である。これまで述べてきたことは、あくまでも説経『をくり』という物語の中の藤沢の御上人の役割であり、位置づけであつた。そこから一足飛びに、この物語の制作者が藤沢の御上人であつたなどと結論づけることはできない。しかし、その可能性はある。そこで以下この点について、さらに考えをすすめてみよう。

まず「離陸」という見事な表現を使った広末は、それがどこで起きたのかを問うた時、美濃国青墓辺りを考え、そこを拠点に活動したのである。説経語りの集団に離陸の推進力を求めた。これを念仏比丘尼とか熊野比丘尼といいかえる研究者もいるが、『をくり』の物語が説経という芸能である以上、漂泊の芸能民や宗教者にそれを求めることは自然である。小栗と照手が死んで後、墨俣<sup>すのまた</sup>・結<sup>むすぶ</sup>という美濃国内の地に祀られたことも合わせ考えてみれば、ますます美濃国内の芸能者や宗教者を離陸の推進者として考えたくなるのは当然のことともいえるだろう。実際、青墓は平安末期から鎌倉初期にかけて世に名だたる傀儡<sup>くぐつ</sup>子の本場でもあつた。固有名詞の知られた遊女が『梁塵秘抄口伝集』や

『平治物語』にも出てくるし、史実としても、源氏が宿の長者大炊氏と深い関係にあったことは周知のことからである。<sup>(24)</sup>

それではほんとうに中世後半から近世にかけての青墓は、『をくり』の物語を離陸させるような強力な文化的影響力を持つ地であつたらうか。榎原雅治が最近発表した中世東海道の研究には、鎌倉初期から室町中期までの宿一覽があがっている。<sup>(25)</sup>『吾妻鏡』以下十四の文献資料によつて旅行者がどこを通つたかを調べたものだが、宿泊地・休憩地・經由せずの三つに分類されて記入されている。それを見ると、青墓は最初の『吾妻鏡』の記事として一一九〇年に一度出たきりで、あとは一切出てこない。圧倒的に隣の垂井宿が多く、赤坂宿が休憩地として加わるくらいである。少なくとも青墓の宿としての機能は、中世後半には大きく減退してしまつているとしか見えない。『大垣市史 青墓編』にも鎌倉初期の活動以後は青墓は登場せず、同様の感じを受ける。<sup>(26)</sup>ただ『岐阜県の地名』を見ると、織豊期の年未詳浅野長吉折紙(市田靖氏所蔵文書)は「大墓宿町人中」に宛てて、戦乱で逃げ出した町人を還住させようとしており、「遊女の宿としての性格は失いながらも、戦国期まで東山道の宿として存続していたと思われる」と書かれて<sup>(27)</sup>いる。

これらから考えると、中世後半から近世にかけての青墓は、町場としては残っていた。しかし都と東国を上下する旅行者が利用するような宿、ことに歴史的にも由緒ある遊女の宿としての機能はすでに持ち合わせていなかったと判断できる。ここには聖観音を本尊とする円興寺という古刹があり、源氏と関係の深かった大檀越青墓の長者大炊一族の墓がある。確かに中世を通じて青墓の宿周辺に唱導文学を生み出すような環境がなかったとはいえない。<sup>(28)</sup>しかしこうした中世後半の青墓の社会的・文化的環境から、説経『をくり』のような強烈なエネルギーを発散するダイナミックな物語が作られ、世に向けて離陸していけるものだろうか。

『をくり』の物語は京から始まる。広末のいう「みかど空間」である。そこで起こる鞍馬の申し子、妻嫌い、深泥が池の童との交わり、これらのいくつかには坂上田村麻呂伝説の影響が濃いとわれている。<sup>29)</sup>この京に始まり、追いやられる常陸、さらに中心舞台となった相模、そこから一方は東海道を上り、一方は日本海から美濃へ、そしてさらに紀州熊野へ、再び京、美濃、相模、常陸、最後はまた美濃というように、空間的な展開の大きさは現存する諸説経の中でも群を抜いている。さらに現世と冥界との行き来をも含めて、この物語がもつさまざまな視点や構想は、単に在地を歩き、あるいは在地にとどまって唱導するといった活動だけで持てるものではない。より以上の高い視点、広い視野、知識の豊富さ、経験の豊かさを備えてはじめて、ダイナミックな小栗の物語としての離陸を実現できるのではないか。こうした離陸させる力、エネルギーがどこにあるかを『をくり』の中で観察したとき、物語の中で舞台を回す要に位置し、その後の展開を仕組んでいった「藤沢の御上人」が大きくクローズアップされてくるのである。

重要なことは、この物語の登場人物はすべて死んでしまっていて、今は生きていないということである。主人公の小栗も照手も人生を全うし、今はともに神に祀られている。当然小栗に手をさしのべた藤沢の御上人も亡くなっているはずである。ところが、実はそうではなかった。藤沢の御上人だけは襲名という行為によって、この『をくり』が語られ読まれている時代、つまり先に考察したところからいえば寛永以前の中世末、近世初頭にも生き続けているのである。生命としての個体、固有名詞は違っても、「藤沢の御上人」は唯一生き続けてこの物語を保証している。あえていえば、ほんの一瞬出てくる帝もそうであるには違いないが、話の中での存在感は比較にならない。まさしく「藤沢の御上人」こそは、この今も生き証人として物語にリアリティーを与えている。復活しその後祀られた小栗、復活させ同じく後に祀られた照手のカミとしてのただならぬ威力を証明してくれているのである。

このように考えると、物語の中で小栗よみがえりの旅を仕組んでいった藤沢の御上人は、実は物語そのものを制作

し、離陸させた当の人物でもあったのではないかという考えが現実には浮上してくる。離陸に関わった者の候補として十分検討に値するであろう。

実はこのような考えに似たものは、早くから研究者により提起されていた。藤沢上人の居所である清浄光寺（藤沢道場、遊行寺）への注目である。例えば福田晃は、語り物が常陸の小栗地方から時宗の本山藤沢の遊行寺に運び込まれたとき、この物語は飛躍的に成長し発展したと言っている。<sup>(20)</sup> この物語が時宗に管理されていた時代に脚色を加えられ大きく成長したというのである。このような見方は、『説経』をくり』研究で疑うものはほとんどなく、通説になっているといってもいいだろう。<sup>(31)</sup>

それでは、私の考えは通説とどう違うのか。私が通説に対し抱く根本的な疑問は、伝説・伝承が遊行寺に運び込まれて成長し発展したといいながら、その先がないということである。そこから先は、楽観的とも思えるくらい一挙に美濃国青墓に飛んでしまう。今、押さえなければならぬ重要なことは何か。それは物語の「離陸」ということである。さまざまな伝説・伝承を取捨選択し、構想し、練り上げ、『説経』をくり』の物語として離陸させていった時と場と関わった人を明らかにしていくことである。その有力候補として藤沢上人・清浄光寺にまで近づいた以上は、ここに焦点を定め、その可能性の有無を探らなければならない。そのためには、藤沢上人や清浄光寺を「時宗だ」「遊行寺だ」というだけの超歴史的、一般的なことは済ましてしまうのではなく、当面する具体的な時代のただ中に入って、その可能性を考察していかねばならないだろう。歴史的に見るのが重要である。藤沢上人や清浄光寺にとっていったいそれはどんな時代で、物語の離陸に関われるような、あるいはそれを必要とするような条件や環境がそこにあったかどうかを検証していかなければならないのである。

## 四 清浄光寺再建の道

藤沢上人とは何か。まずこの点を確認しておこう。鎌倉中期、一遍は一所に止住することなく諸国を巡歴し、賦算活動によって念仏を広めた。一遍の死後、後継者たちもその精神を受け継いで活動し、遊行上人と呼ばれた。しかし同時に念仏の道場が各地に建てられ、そこに止住する僧も現れて次第に時宗の教団が形成されるようになる。いくつにも分派した時宗の中心でもあった遊行派は、それまでと変わらず遊行上人が回国巡行を続けたが、遊行を続けることが困難になると、相模国藤沢の清浄光寺（藤沢道場 通称遊行寺）に引退した。これを独住といい、寺に住むようになった上人は藤沢上人と呼ばれる。鎌倉末以降は藤沢上人が没すると、諸国を回国中の遊行上人はその地位を後継者に譲って自らは清浄光寺に入り、藤沢上人を継いで独住するのが時宗遊行派の慣例となった。一遍を初代の遊行上人とすると、第四代の遊行上人呑海が初代藤沢上人となる。この時以来、遊行上人と藤沢上人とは併存することになるわけである。<sup>(33)</sup>

『をくり』の物語は、室町中期の応永三十年（一四三三）、鎌倉公方足利持氏に対して謀反を起こして没落した常陸小栗氏の事件が源流にあると考えられている。小栗氏が関東の政治的舞台に登場し話題になるのは室町中期だから、ここではそれ以降の藤沢上人の歴史について考えることとする。

表Ⅱは『時衆年表』<sup>(34)</sup>と橘俊道『時宗史論考』<sup>(35)</sup>を参照しながら、遊行上人と藤沢上人の関係をわかりやすくするため作成した対照表である。具体的に表を見ながら話を進めよう。最初の太空という人物は第十四代遊行上人で、応永十九年（一四一二）に遊行上人になっているが、応永二十四年（一四一七）、先代藤沢上人の死去にともない第八代藤沢上人になっている。そして永享十一年（一四三九）、六十五歳で亡くなっている。この人物の藤沢上人時代に小

栗満重の足利持氏に対する謀反があり、小栗氏は敗北する。小栗の事件を年代記と説話的叙述の両方から記した『鎌倉大草紙』の中に、満重の息小次郎助重が藤沢道場に逃げ込み、藤沢上人が助けてこれを三河国まで落とすとすという話があるが、その時の藤沢上人がこの太空に相当することは従来も説かれる通りである。<sup>(35)</sup>

太空の譲りを受けて第十五代遊行上人になった尊恵という人物は、太空が亡くなる前に、正長二年（一四二九）、遊行廻国中、京都の七条道場において六十六歳で亡くなっている。そのため尊恵は藤沢上人にはならないままで終わることになる。

さて、この表を見て意外なことは、藤沢上人が第十二代の一峯以後、第十三代普光までの間、大きく飛んでいる点である。その間には六名の人物の名前が右に小さく入っているが、彼らは『遊行・藤沢両上人御歴代系譜』(以下『歴代系譜』と略す)によると、歴代藤沢上人には数えられていない。つまりその間の七十七年間、藤沢上人はいなかったかに見える。これはどういふことだろうか。

表の右側には、該当する時代の清浄光寺、および藤沢上人に関する重要な事件などが記されている。これを見ると、第十二代藤沢上人一峯が亡くなった永正九年（一五一二）の翌十年（一五一三）、清浄光寺は当時この地方に勢力を扶植していた三浦氏とこれを攻める北条氏の交戦による兵火を受け、焼失してしまっていたのである。当然一峯のあと第十三代藤沢上人に就任するはずの第二十一代遊行上人知蓮は藤沢に居ることはできず、その年滞在先の駿河長蓮寺で亡くなった。焼失時清浄光寺の本尊も駿河に移されたが、知蓮の死後、さらに甲斐の一蓮寺に移された。こうして以後七十七年間、遊行上人は引退した後藤沢上人として藤沢に入ることはなかったことになる。また清浄光寺本尊も藤沢にはなかった。<sup>(36)</sup>

しかし相模国藤沢にはいなくても、藤沢上人はいた。前任者が亡くなった知らせを受けると遊行上人を後継者に譲

表II

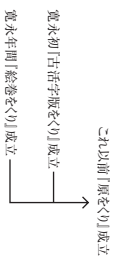
遊行上人			藤沢上人			関連事項		
示寂地	年齢		示寂地	年齢				
④香海			①香海	1325(延永19) 1327(康保2)	藤沢	63才		
~~~~~								
1400-							1400-	
10-	⑧太空	1412(延永19)					10-	
20-	⑤尊恵	1417(延永24)		1417(延永24)			20-	<ul style="list-style-type: none"> <li>●1418(延永25) 藤沢(醍醐)方興善塔建立</li> <li>●1223(延永30) 小栗彌重、足利持氏に藤沢(東北)没落</li> </ul>
30-	⑥南要	1429(正長2)		⑧太空			30-	<ul style="list-style-type: none"> <li>●1438(永享10) 永享の乱、足利持氏自殺</li> <li>●1440(永享12) 結城合戦、小栗氏一旦回復</li> <li>●1441(嘉吉元) 持氏遣見殺さる</li> </ul>
40-		1440(永享12)				藤沢	65才	
50-	⑦圓幽		⑨南要				50-	<ul style="list-style-type: none"> <li>●1455(康正元) 足利敏氏、小栗氏を滅ぼす</li> </ul>
60-		1466(文正元)					60-	
70-	⑧如象	1467(延仁元)				藤沢	84才	
80-	⑨尊皓	1471(文明3)	⑩如象	1470(文明2)			80-	<ul style="list-style-type: none"> <li>●1479(文明11) 鎌倉大草紙に九以後に成立</li> </ul>
90-						藤沢	76才	
1500-	⑩一峯	1495(明応4)	⑪尊皓	1494(明応3)		藤沢	70才	
	⑫知進	1497(明応6)	⑫一峯	1496(明応5)			1500-	



説経『やくり』の源田勝兼

10	②意兼 1513(永正10)		1512(永正9)	藤沢 藤沢長善寺	63才	●1513(永正10) 北条・三浦氏の戦い、上野清光寺焼失
	②務殿 1514(永正11)	藤澤浄光明寺 49才	1514(永正11)	近江・桑白寺	54才	本尊・蔵阿長善寺に遷座
	②不才 1518(永正15)		1518(永正15)	豊前西教寺	67才	●1520(永正17) 本尊 甲斐一進寺に遷座
20	⑤弘天 1520(永正17)		1526(大永6)			
30	⑤玄達 1528(享徳元)	越後権養寺 57才	1528(享徳元)			
	1536(天文5)					
40	⑦真敏 1548(天文17)	伊予願成寺 49才	弘天			
	1549(天文18)	安芸廿日市 43才				
50	⑧通田 1552(天文21)					
	1549(天文18)					
	1561(天文20)					
60	⑨作光 1562(永禄5)	出羽長泉寺 62才				
	1563(永禄6)		1571(元龜2)	越前新善光寺	85才	●1558(永禄元) 作光上人、山勝のことで玉繩地を以て抗議 ●1559(永禄2) 北条氏、寺領の一部を奪進
70	⑩有三 1573(元龜4)					
	1584(天正12)		1583(天正11)	越前西方寺	72才	●1571(元龜2) 武田信玄、清光寺に・藤沢200貫、俵野9100貫の土地を寄進
80	⑪同念 1589(天正17)		同念	日向光無寺	70才	
90	⑫普光 1612(慶長17)	周防善福寺 70才	1589(天正17)			
1600	⑬清悟 1613(慶長18)					
10	⑭燈外 1627(寛永4)		1626(寛永3)	藤沢	84才	●1603(慶長8) 普光・清悟、伏見で家康に面会 ●1604(慶長9) 留主御看守法阿死去 ●1607(慶長12) 普光、清光先尊に帰住
30	⑮法爾 1640(寛永17)	甲府一進寺 78才				
40	⑯如短 1641(寛永18)		1644(寛永21)	藤沢	84才	
	1645(正保2)		1646(正保3)	藤沢	69才	
50	⑰記資					

○表作成にあたっては、基本的には『時業年表』によった。交代時期に若干のズレが出るが、無視した。 ○第二十一代遊行上人知道を藤沢上人に入れたのは橋俊道の説によった。



って自らは藤沢上人となり、地方の寺院に入って独住した。時には移動しつつも、最後にはある寺院に居を定めてそこで亡くなった。『歴代系譜』では勘定されていないが、第二十一代遊行上人知蓮以下、第二十二代意楽、第二十四代不外、第二十五代仏天、第三十代有三、第三十一代同念がそうである。それぞれ駿河、近江、豊前、越前、越前、日向各地の寺院で亡くなっている。かれらの中にはその地を新たな藤沢山にしたいと望む者もあったようだが、結局は戦乱が激しく実現には至らなかった。<sup>(38)</sup>

このような変転を経た後、天正十七年（一五八九）、北条氏が豊臣秀吉に攻められ滅亡する前の年になって、七十七年ぶりに第三十二代遊行上人普光が、越後から藤沢上人の名を負って「帰国」することになる。<sup>(39)</sup>しかしその普光も実際に藤沢の地に入り独住するようになるのは、後述するような事情から慶長十二年（一六〇七）のことであった。永正十年（一五一三）清浄光寺が焼かれてから九十四年目のことである。

室町中期以降、近世初頭までの清浄光寺と藤沢上人の動向をおおまかに追ってみた。これらの歴史を踏まえることが、藤沢道場清浄光寺がこの物語の離陸の場ということが本当にあり得たかどうかを考えるには不可欠である。あり得るとしたらそれはどの藤沢上人の時が条件的に最もふさわしいか。それを考察するために、この時期を大きく四段階に分けて考えてみることにする。

1 小栗事件が起きた応永三十年（一四二三）から清浄光寺が焼ける永正十年（一五一三）までの間は、藤沢上人の藤沢独住も行われ、遊行派本山としての活動も活発であった。この時代、関東では鎌倉公方をめぐる戦乱が激しくなり、小栗を滅ぼした鎌倉公方足利持氏が京都方に攻められて滅亡する永享の乱や、持氏の遺児を結城氏が担いで蜂起した結城合戦が続いている。特に結城合戦では、捕えられて京都に護送される春王丸・安王丸兄弟が、美濃の垂井宿

で斬首される話が『結城戰場物語』となつて世に知られている。応仁の乱以前にすでに成立していたとされる叙情性豊かなこの作品は、垂井宿の時衆道場金蓮寺で管理され語り広められたといわれているように、この時代の時衆文学の代表的なものでもある。こうした唱導性が色濃く漂う作品に比べ、説経『をくり』は話の調子があまりにも異つていて、時衆に関わる同時代的な作品とはとても考えられない。『をくり』の離陸がこの時代の清浄光寺において起きる可能性はないといつてよい。

もう一つこの時代に関連するものとしてふれておかなければならないのは『鎌倉大草紙』のことである。この書の成立は文明十一年（一四七九）以後、戦国末期までの間とされるだけで、詳しいことはよくわかっていない。<sup>(41)</sup> ここには小栗事件の経過を年代記的に記述する部分と、後日譚を説話的に記す部分が併存している。説話的な部分は、説経『をくり』の登場人物や場所、設定などと共通するところが多く、和辻哲郎以来早くから注目されてきた。<sup>(42)</sup> 常陸小栗氏、相模権現堂、遊女照姫（照手）、毒殺、馬の鬼鹿毛、さらに藤沢上人というように、説経『をくり』の物語の主要な要素が出揃っている。このよく似た二つにどんな影響関係があったのか、これまでも議論されてきたところだが、いま問題の箇所は、藤沢の上人が盗賊の手から逃がれてきた小栗をかくまい、その領地の三河まで門弟の僧を付けて送つたところである。無事三河に逃げのびた小栗は力を蓄えて再び東下し、自分を殺そうとした盗賊を誅伐し、また自分を救つてくれた遊女を見つけ出して報謝している。

この『鎌倉大草紙』で押さえておかなければならない藤沢上人の役割は、駆け込んだ小栗をかくまい三河に逃がしてやったというものである。決してそれ以上の関与ではない。時宗寺院に限らず、当時かなり多くの寺院がアジールの性格をもっていたことはよく知られたことである。<sup>(43)</sup> ここでもそれで、特に小栗事件があつたころの清浄光寺＝藤沢上人は「敵御方供養塔（怨親平等碑）」でも名高い太空中人であつたから、三河小栗氏はそうした清浄光寺＝藤沢上

人の庇護というエピソードも含み込んで、一族の先祖の話として語り伝えたのであろう。<sup>(45)</sup>それが戦国期の関東でも流布して、『鎌倉大草紙』の編者が掬いあげたと考えるのが無理のないところである。この話に藤沢上人が出てくるからといって、その前提には室町から戦国のころすでに小栗滅亡やよみがえりの話が清浄光寺に管理されていたとまで言うことは到底できない。根拠が乏しすぎる。<sup>(46)</sup>そうしたことから、この時期『をくり』の物語が清浄光寺で離陸態勢に入っていたということはあり得ない。

2 永禄二年(一五五九)、第二十九代遊行上人体光は藤沢道場再興について北条氏と交渉し、十三貫七百二十六文の寺領を安堵された。<sup>(47)</sup>清浄光寺再建への歩みとして、まずは寺領回復の動きが始まる。焼失した永正十年(一五二二)からこの永禄二年までの間を考えると、その間は廻国を続ける遊行上人とは別に、藤沢上人は駿河、近江、豊前、越前、越前、日向の各寺院に独住してそれぞれそこで亡くなった。相模の藤沢からはるか遠く離れた地であった。それでは当の藤沢の寺はどうなっていたか。この間については、空白の時代ともいえるほどで、ほとんど何も分かっていない。一時駿河長蓮寺にあった本尊も永正十七年(一五二〇)には甲斐武田領内の一蓮寺に移されている。寺の焼け跡は「旧跡藤沢」「藤沢古跡」「元藤沢」などと呼ばれているから、この地を支配した北条氏は清浄光寺を保護して復興させる姿勢は全く示さなかったようである。門前には以前から寺と関係をもっていた非僧非俗の客寮と呼ばれる職人や商人は残っていてそれなりの都市的展開は示していたし、<sup>(48)</sup>寺域には、若干の時衆僧尼も何らかの理由でいたであろうが、およそ積極的・求心的な動きのできる状況とは言えず、清浄光寺としては先の見えないもとも暗い時代であったと思われる。説経『をくり』が離陸できるような環境とは程遠かったにちがいない。

3 遊行上人体光が北条氏との間に藤沢道場再建の準備として寺領回復の動きをはじめたのは永祿初年であるが、その後実際に再建工事が始まるまでにことがスムーズに運んだとはとても言えない。しかし北条氏との交渉の成果として、この「旧跡藤沢」「藤沢古跡」などと呼ばれた跡地を管理するために留守の時衆を置くことができたらしい。ところが天正五年（一五七七）のころ、この地に「悪比丘」つまり悪僧が住みつき、その追放を依頼する文書が遊行上人同念から玉縄北条氏などに出されている。<sup>(29)</sup> 遊行上人、藤沢上人の管理下にありながら、トップの統制には従わず、この地を自分たちの自由利用しようとする者たちがいたのである。その後こうした者は追放されたようだが、依然として住職不在のまま、「藤沢古跡」の維持管理は留守僧に任されていた。彼らは「看坊」とか「看守」と呼ばれている。<sup>(30)</sup> 当然彼らが住まう小さな堂舎は建っていたらう。

こうした時代、統制に従わない反秩序的な者が集まり猥雑な空気を作っていたことは、文学が醸成される環境としては面白い。しかし結局は弾圧されてしまったように、エネルギーが集中的に発揮されたり統合されるような時代ではなかった。遊行上人には少し動きは見られたものの、藤沢上人はまだ地方に独住中で、積極的に指導力を発揮できる立場にはなかった。説経『をくり』のような、藤沢上人自身が要に位置して仕掛け人的役割を果たす、そんな現実的条件はまだ到来していなかった。

4 それではいつから本堂以下の再建が本格的に始まり、藤沢山は復興するのか。史料では、天正十五年（二五八七）に北条氏直が再建用材の伐り出しの禁を解いたといわれているが、実はこれに対しては否定的な見解が強い。<sup>(31)</sup> 従って再建の過程を具体的に教えてくれる史料は全くといっていいほど残っていない。確実なことは第三十二代遊行上人普光が天正十七年九月その地位を満悟に譲り、回国中の越後から関東に帰国したということ、それから後述するように、

その後かれが実際に相模国藤沢に戻り、名実ともに藤沢上人が復活したのは慶長十二年（一六〇七）だということ、そしてその時には、清浄光寺の再建はすでに成っていたという事実である。不思議なことだが、普光は関東に帰国したとはいいながら、藤沢にはなく、常陸国水戸で有力戦国大名佐竹氏の庇護を受け、藤沢上人として活動していたのである。<sup>(53)</sup> 天正十九（一五九一）年その地に神応寺を建て、これを藤沢山と称して時宗遊行派の拠点にしようと考えていたらしい。まだ相模の藤沢では再建の機が熟していなかったのかもしれない。しかしその普光も庇護者の佐竹氏が関ヶ原の戦いの二年後出羽国秋田に国替えになると、常陸での活動は大きく制約された。

それでは普光以外の誰が実際の再建活動に携わり、これを完成させたのだろうか。「藤沢山過去帳」の「門末僧侶」の部によく知られた記述がある。<sup>(54)</sup> この過去帳は史料的价值が非常に高く、内容的にも信用性があるといわれているが、そこには「寛永三丙丙寅五月二十二日於藤沢入滅八十四中興上人遊行三十二代他阿上人」と記入され、その上欄余白に第三十七代遊行上人託資の筆跡で「当山実ノ中興者一蓮寺十七代竜華院法阿弥陀仏也 法阿当山再建之時 三十二代上人者水戸神応寺ニ御在住 慶長九年六月十六日法阿於当山往生之後 同十二年三十二代上人当山ニ御入山也」と書き込まれている。つまり普光その人ではなく、留守職として置かれた看坊という立場の竜華院法阿弥陀仏天順という人物が再建したこと、そしてかれは亡くなる慶長九年（一六〇四）までこの藤沢にいたというのである。もともと甲斐国一蓮寺という由緒ある寺院の住職で、引退後藤沢清浄光寺の復興にあたり、それを完成させて藤沢で亡くなった。その評価は先の書き込みからしても、非常に高かったと思われる。

『歴代系譜』で藤沢上人の復活は第十三代の普光であるが、普光が寺院の建築上の復興に当たったわけではなく、法阿であったことは重要である。しかも彼の死後三年たってから普光が藤沢に入ったという点も不可解といえはいいえ。両者の間に何らかの確執があったのだらうと推測されている所以である。<sup>(55)</sup> しかし、今重要なことは、清浄光寺の

再建が法阿の死より前、つまり慶長九年までの間に成っていることである。新しい東海道伝馬の制度が慶長六年（二六〇一）に設けられ、藤沢宿も開設された。<sup>56</sup> 清浄光寺の再建と東海道の開通、宿場の開設のどちらが先であったかはわからないが、両者あいまってこのころ藤沢の地は相貌を一変させていたにちがいない。

## 五 「引く物語」の誕生

再び説経『をくり』の離陸の問題に帰ろう。藤沢山清浄光寺の再建事業が本格的に立ち上がり藤沢一帯が活気を帯びだしたころ、それにあわせて資金、労働力の調達が現実の問題として浮上していただろう。中世的な寺院復興事業の在り方からすれば、当然勧進という動きがあったであろうことは想像される。<sup>57</sup> 『をくり』がそうした勧進を推進する目的で制作されたのではないかという考えが出てきてもおかしくはない。しかし、もし『をくり』が復興勧進を目的に制作されたのであれば、物語の中にもっと清浄光寺が出てきてもよさそうである。例えば清浄光寺の寺院としての由緒を説くなどして、聴き手、読み手の関心をその方向に持っていくのが当然だろう。ところが本文には、そうした寺院としての清浄光寺（藤沢道場、遊行寺）の姿は影も形も見られないのである。寺院の建築を想起させるような言葉は全くない。したがってこの復興再建と勧進、それに『をくり』の制作を結びつけるという考えは可能性のうちからはさすがざるを得ない。『をくり』の物語が離陸する条件はまだ整っていないのである。

結論から言うと、離陸は普光が藤沢に上山する慶長十二年（一六〇七）以降に始まるとするのが、条件的あるいは状況的にはもっともふさわしい。なぜか。もう一度『をくり』の物語に戻ろう。

小栗は京都から常陸に流される。その後の展開は相模、冥界、再び相模、東海道、紀州熊野と大きく動いていくが、

よみがえりを果たした小栗は最終的に常陸に帰り大往生する。この常陸が問題である。

そもそも小栗氏は常陸の豪族だから、常陸が出るのは当然だというように簡単に流してしまうと、問題の肝心な点を見逃してしまっただろう。小栗が「常陸小栗」であるのは当然としても、相手の照手は相模出身であるにも拘らず「常陸小萩」を名乗り、しかも連呼するかのごとく常陸を強調する。二人の主人公はともに常陸を背負う。常陸はまちがいなくこの物語の故国ともいべき国であった。そこでもう少し詳しく見るために、物語全体で常陸がどういう言葉と一緒に出てくるかを抜き出して見ておこう。

常陸小栗殿

みずからが知行は常陸なり 常陸の国へお流しあつてたまわれの(母のことば)

常陸東条・玉造の御所の流人

常陸三かの庄の諸侍

常陸の国(の)小栗殿

常陸の国へお戻りある

常陸の者、常陸の者では御ざない

常陸小萩(殿)

常陸の国にてはたれの御子

常陸の国へ所知入り

常陸の国へお戻りあり

これらすべてを並べてみると、常陸そのものが物語の実際上の舞台になることはないことがわかる。また具体的な



地名が出るのは一度だけ<sup>(58)</sup>、あとはすべて「常陸」という国名に終始している。今はこの点に注目しておきたい。

さて普光である。先にも述べたように、普光は藤沢上人になりながらもすぐに相模藤沢には入らず、常陸水戸を中心に、一時はそこに藤沢道場をつくって活発な活動を展開した。常陸に入ってほぼ十八年間である。なぜそうしたか。戦国大名佐竹氏の庇護があったことは間違いないが、実は、普光自身が佐竹氏の一族であった。父は佐竹一族小野平の城主佐竹義高とい<sup>(59)</sup>った。佐竹氏はもともと常陸北半の戦国大名だったが、北条氏が滅ぶ天正十八年（一五九〇）には南半にも進出し、水戸の江戸氏をはじめ、大掾氏などの対抗勢力を一掃し、水戸を中心に常陸一国を統一した。秀吉の信頼も厚く、下野国にも領土を持ち、五十五万石近い大大名となった。普光は、そうした一族佐竹氏の庇護をうけて水戸に神応寺を建て、藤沢道場とし、再建の進まない相模藤沢清浄光寺の役割をここで果たそうとしたほどであった。しかし関ヶ原の戦いの後、佐竹氏は出羽の秋田に国替えになる。残された常陸の時宗寺院は大きな打撃を受け、普光が拠った神応寺の所領も激減した。そうした苦境を普光は乗り越え、慶長十二年（一六〇七）、再建成った相模藤沢の清浄光寺に入るのである。

普光と常陸の間には、このように尋常ではない関係があった。先にも述べたが、『をくり』では常陸は極めて強く印象づけられる国である。にもかかわらず興味深いことに、常陸国内は実際上の舞台になることはなく、具体的な地名が出るのはたったの一度だけで、「常陸」という一般的な国名が圧倒的に多い。明らかに具体的な在地性というものを欠いているのである。ここには豪族小栗氏が本来関係したような地名などはまったく見当たらない。

そのことは何を意味するのか。それは「常陸」という場合、そこに何があったのか、そこで何が行われたかが問題ではなく、物語の中で「常陸」という国名が語られること自体が重要だったのである。歴史上の存在としての小栗氏とはもはや完全に切れている。常陸を強調するのは常陸を出身地とし、またそこで長く活動していた藤沢上人普

光の積極的な意志が働いていると考えなければならない。常陸への思いである。もし清浄光寺の実質的な再建者、看守法阿天順がこの物語の離陸に関わっていたとしたならば、こうまでして「常陸」を強調することがあっただろうか。かれは戦国大名武田氏の庇護下にある甲斐国の名門一蓮寺の住職であり、むしろ甲斐を背負っていたのだから。

以上、説経『をくり』の離陸する環境が藤沢上人の周辺にあったかどうか、あったとすれば時代的にどの辺りが適当かを検討してきた。その結果、第十三代藤沢上人普光の時代、普光の周辺にその的をしぼり込むことができたと考ええる。しかしこれでも依然として状況証拠の積み重ねの感が強く、今一つ釈然としないものが残るだろう。そこで次の史料を示してみたい。

「彦岐、対馬へお流しあるものならば、また会うことは難しいこと。みずから知行は常陸なり、常陸の国へお流しあつてたまわれの」

父二条大納言が禁忌を犯した小栗をどこに流すか思案している時、常陸へと嘆願する小栗の母のことばである。これに納得して父は小栗を常陸に流すことになる。なぜ母は「みずから知行は常陸」といったのか。これはどういうことか。説経『をくり』における小栗の母の出身を問題にしなければならない。本文はどういつているか。

「母は常陸の源氏の流れ」

といつているのである。これはまことに重大なことばである。にもかかわらず、このことに固執して考えを進めた研究を私は知らない。

そもそも小栗氏は常陸大掾氏の一支族、その大掾氏は常陸きつての名門、れっきとした桓武平氏である。もしこの説経『をくり』が小栗氏の先祖語りや供養の色合いを少しでも残すものであったなら、源氏と平氏を取り違えるなどという迂闊なことは絶対にやらないだろう。いや、これは母親の家系の説明であり父親の家系を問題にしているわけ

ではないのだから、母の家を源氏といったからとて別段矛盾はないという考えもあるだろう。しかしこの物語を聴き、読み、享受するのは、まずはなんといつても関東在住の武士や民衆・僧たちである。京都の貴族や町衆ではない。そこで氏族の出自を言うからには小栗氏の由緒・家系を示唆する「平氏」を残すのが常識というものだろう。ところがそうした配慮がないどころか、あろうことか「常陸の源氏」とまで言い切っているのである。

「常陸の源氏」といえば、だれにでも了解できることがあるだろう。中世から近世にかけて関東の武士であれば、即座にそれは佐竹氏のことと判断できるほど周知のことであつたと思われる。甲斐の武田、下野の足利、上野の新田とならび、常陸の佐竹は平安末期・鎌倉時代以来の源氏の名門であつた。

説経『をくり』の小栗には常陸平氏の血ではなく、常陸源氏「佐竹」氏の血が入っていたのである。先に述べたように地名の点からも、また今述べた血筋の点からも、本来の小栗氏からはるか遠く、はるか高くまで離陸は進んでいた。こうした離陸に常陸源氏佐竹氏の血を引く第十三代藤沢上人普光の関与を読むことはもはや容易なのではないか。物語の離陸が普光の藤沢入山の慶長十二年（一六〇七）以降、普光その人の周辺で起きたと考える蓋然性がさらに高まつたと考える。

普光は第十三代藤沢上人として慶長十二年に藤沢に入り、寛永三年（一六二六）八十四歳で亡くなるまで十九年間独住した。清浄光寺の建築面での復興再建事業に関わることは少なかつたようだが、『藤沢山過去帳』には「藤沢中興上人」と書かれている。どういう活動からそう言われるようになったのか。

これも有名な事実だが、帰山した年の慶長十二年、駿府で家康に面謁し、本寺の進退に従わない末寺に対する措置を尋ねた。家康からは「何事も本寺の進退たるべし」との返答をもらっている<sup>⑩</sup>。これを機会に、本末関係の強化というすべての宗派に共通する幕府の宗教政策に則って、普光は幕府の権威を背景としながら末寺統制の体制を作り始め

ている。六年後の慶長十八年には諸末寺法式を定めた。その中で前の遊行上人が作った置文を否定し、遊行上人よりも藤沢上人の方が上位であることを明確に示した。<sup>(41)</sup> 徳川政権下では、時宗の性格が遊行中心、遊行上人中心から、藤沢中心、藤沢上人中心へと一大転換するが、普光はまさにその転換点に位置して時宗におけるピラミッド型の体制を創りあげたのである。ハード面ではなく、ソフト面での体制を確立させたところに、かれの「藤沢中興上人」としての最大の特色があった。

ここまで説経『をくり』の物語の離陸を可能とするような環境や条件がはたしてあったのかを、藤沢上人、清浄光寺に光を当てながら検討してきたが、普光とその時代こそはそれに最もふさわしい環境、条件を備えていることが証明されたと考える。

普光は天正十二年（一五八四）八月二十三日、日向の光照寺で第三十一代遊行上人同念から後継者に指名された。それより七年前の天正五年には有阿弥陀仏の名で同念上人の側近として文書も発給しているから、早くから囑望される存在だったのだらう。<sup>(42)</sup> 同念はいわゆる『遊行三十一祖京畿御修行記』とよばれる、天正六、七、八年伊勢から尾張、美濃、近江、京都、大和をまわった貴重な回国記録を残している。<sup>(43)</sup> 信長からは好意的に処遇され、また京都では二度にわたり参内、一度は正親町天皇に拝顔して十念を授け、多くの公家や女房衆にも近しく接している。藤沢の清浄光寺がまだ復興しない混沌の時代にあっても、遊行上人そのものは戦国大名や天皇にまで歓迎されるほどで、その通行は保証され、大名行列の感もあった。当の普光がこの回国に同行していたかどうかの確証はないが、自身が遊行上人になった天正十四年三月、四月には京都の時宗遊行派の拠点七条道場金光寺に留錫したことがわかっている。<sup>(44)</sup> 京都の文化や情報にもよく通じていたと思われる。

その後信濃、越後を回国、天正十七年に遊行上人の地位を満悟に譲って藤沢上人となり、直江兼統発給の過書によ

って越後から関東に帰国するのである。このような普光の経歴を見ても交流関係は広く、京都や地方各地の情勢にも明るく、様々な知識・教養・経験というものも豊富であった。こうした蓄積を存分に活かして説経『をくり』の制作、離陸に関わったと思われる。

これまで藤沢上人普光という個人に集中して論じてきたが、だからといって説経『をくり』の離陸のことすべてをかれ一人の功績に帰すつもりはない。かれの周囲には遊行上人の時代から、また藤沢上人として常陸の時代から行動を共にしてきた男女の門弟衆がいる。さらにはまだ跡地であった藤沢で、実質的に藤沢山の復興を担った看守法阿天順を支えた者たちがある。特に後者のなかには、普光に批判的な目を向ける者も少なくなかったであろう。常陸派と相模派の簡単には埋めがたい感情の溝があったであろうことは想像に難くない。百年近い藤沢山の空白を埋め、名実ともに清浄光寺の復興を実現するには、まずもってこの二派の対立を融和させる必要があった。常陸小栗と相模横山照手の結婚の物語にはこうした現実打開への期待が投影されていたと見るのは、あまりにも穿った見方であろうか。

今、そこまで深読みすることにはやゝためらいを覚えるとしても、揺らいでいた時宗社会での藤沢の位置を鮮明にすることは差し迫った緊急の課題であった。時宗遊行派のアイデンティティーを取りもどし、さらに強固なものにする何らかの文化的取り組みが全山として求められていたと思われる。そうした時に持ち出されたアイデアが説経『をくり』の制作であったのだろう。餓鬼阿弥陀仏となった小栗が乗る土車を藤沢の御上人が引く、大勢の者が引く、そして妻照手が引く。相模藤沢を起点にした旅の終点熊野本宮湯の峯で小栗はよみがえり、真にこの世に復活するといふ土車引きを影の主役とした「引く物語」の誕生であった。

日本の歴史において「引く」という行為は、ふつう漠然と考えられているよりはるかに深い意味をもっている。木引き、石引き、綱引き、鐘引き、みあれ引き、地引き、篠を引く等々、引く行為やそれに関する言葉はさまざま形

で登場する。中世末から近世初頭にかけて「引く物尽くし」というものが文芸のあちこちに現れることも、実はそうしたことと無関係ではない。ここで論じる余裕はないが、いずれ考えなければならぬ重要な問題だと思っている。要点のみを言えば、「引く」という行為は単なる身体的動作ではなく、民族の古層に届く深い精神性を帯びた動作だということだ。そうした古層、いかえれば水脈の中から、それぞれの社会や集団にふさわしい「引く行為」を汲み上げ、それぞれに固有の「引く」行事や言説を生み出していく。中・近世はそうした時代だった。

時宗の場合、時宗に最もふさわしい引く行為は「土車を引く」というものだった。「一引き引いたは千僧供養、二引き引いたは万僧供養」の呼びかけとともに、藤沢と熊野という時宗にとってのシンボリックな両極を結ぶ線上を舞台に、餓鬼阿弥陀仏の旅はくりひろげられる。周到に仕組まれた土車の旅によって、めでたく小栗のよみがえりは果たされる、そのような文芸を作り上げたのである。時宗遊行派あげての新しい文化創造であった。その中心には牽引者としての藤沢上人が位置したが、もとより背後には多くの男女の時衆僧尼がいて物語の創作に関わった。こうして、それまでの唱導性が色濃く漂う中世的時衆文学とは一味も二味も違うものが生まれた。多くの研究者もいうように、女性の恩愛が前面に出た、人間的な物語ともなったのである<sup>(67)</sup>。

最後に思い出しておこう。これまで説経『をくり』と呼んできたものは、寛永年間制作の『絵巻をくり』に基づいているのだということ。全長三百二十四メートルにも及ぶ途方もなく長い豪華な絵巻である。言葉だけで読むのはまた違って、絵では延々と道行場面が続いていることに驚かされる。これでもか、これでもかといった具合である。近年では岩佐又兵衛作とされているが、<sup>(68)</sup>気になるのは寛永という年号である。寛永といえは普光の亡くなったのが寛永三年（一六二六）、制作時期と非常に接近している。ただし岩佐又兵衛が越前福井から京を経て江戸に下ったのが寛永十四年（一六三七）だとすると、<sup>(69)</sup>当然絵巻制作はそれ以降になるから普光は絵巻のことは知らないことになる。

普光に続く第十四代藤沢上人（第三十四代遊行上人）燈外は、寛永四年から正保元年（一六四四）まで十七年間その地位にあった。燈外も普光と同じく八十四歳まで生きた特別長寿の人物である。それではこの人は絵巻のことを知っていたのだろうか。あるいは実物を見ただろうか。確かな根拠は何もないが、もともと藤沢上人の下で離陸した説経『をくり』の物語が、当の藤沢上人普光や燈外の全く与り知らぬところで、これほど豪華な絵巻として作られるということがありえたかどうか。今後『絵巻をくり』の制作ということを考える時には、十分考慮しなければならぬ問題のように思われる。

### おわりに

伝説・伝承から距離を置き、文字になった説経『をくり』の本文にこだわり続けた本稿で、今一つしっくりこなかったのは美濃国である。一つは物語の中心的な舞台である青墓宿、もう一つは『をくり』が語られ読まれているその時代に、現実に小栗が祀られている墨俣という場、そしてその近くの照手が祀られている<sup>むすぶ</sup>結という場。東国で離陸した物語がなぜこういう場所に重要な役割を与え、また現実に祀られているのか。

青墓についてはこう言われている。そもそも主人公の一人である照手の像は、女性の語り手でもあった念仏比丘尼（熊野比丘尼）が自分たちの巫女としての姿を形象化したものである。こうした念仏比丘尼の活動の拠点<sup>(10)</sup>が青墓であり、『をくり』の物語を最終的に作り上げ、管理しているのだと。言いかたを変えれば、離陸はここで起きたということになる。

青墓が重要な舞台となっている理由はこのような事情から説明されるのだが、先にも疑問を呈したように、中・近

世の転換期、ほんとうに青墓周辺でこのような女性集団が活動していたのだろうか。『をくり』の物語が持つような強烈なエネルギーを噴き出させる社会的、文化的環境がその頃の青墓にあったであろうか。確かにかつて源平の時代、青墓は源氏の鼻貞もあつて遊女宿の長者の下で栄えていた。今様の名手の傀儡子もいて、みやこに向けても特別な文化的影響力を備えていたことは事実である。しかしその時代をもとにしてつくられた青墓像を、そのまま単純に四百年も下つた中世末から近世初めに持ち込み現実の姿とするのは、あまりにも無謀すぎないだろうか。それなりの証明があるのだ。

印象でしかないが、説経『をくり』の本文では意外に美濃の在地色は弱い。餓鬼阿弥陀仏の道行では尾張国内を過ぎると、「杭瀬川の川風が、身に冷ややかに沁むよ、さて小熊河原を引き過ぎて、おいそぎあればほどもなく」美濃国青墓の宿万屋の門前に着いてしまう。杭瀬川はかつての揖斐川本流で、現在の木曾三川のうちでもっとも西を流れている。それに対して小熊河原は尾張と美濃の境を流れる墨俣川（いまの長良川）の東岸（尾張国）にあつたはずである。<sup>(7)</sup>このように川と地名の位置関係が逆転していて大きな食い違いを見せている。また照手に引かれて青墓宿を出た車は「笹の葉に幣を付け、心はものに狂わねど、姿を狂気にもてないで、引けよ引けよ子どもども、ものに狂うてみしようぞと、姫が涙は垂井の宿、美濃と近江の境なる、長競、二本松、寝物語を引き過ぎて」というように、美濃の垂井宿を過ぎるとあつという間に隣の近江国の地名になってしまふ。後に祀られることになつた墨俣も結も通過地点としてさえ出てこない。青墓そのものは物語の舞台になっているが、周辺の美濃国一帯は在地的な臭いがせず、地理的リアリティもおぼつかない。青墓に女性の語り集団がいてこの地域を中心に活動し、現実的な力を發揮していたというなら、もう少し地に足のついた在地性が感じられてもよいのではないか。現実を踏まえた描写というよりは、むしろ遠い過去の青墓に舞台を借りた結果のような気がする。



といつてもこれは私の印象であつて、従来の説を全否定するところまでは行っていない。ただいつまでも抽象的な青墓論に拠っていたのでは研究の進展はない。青墓の地そのものに文化的影響力があると考えるのであれば、この中世末・近世初という時代に即して、それを証明しなければ説得力はないのである。

それは小栗が死後、正八幡として祀りこめられた場、美濃国安八郡墨俣にしても同様である。墨俣は、かつては墨俣川（現長良川）が元の本曾川本流と合流する地点の西岸にあった宿である。墨俣川は美濃・尾張の国境を流れる大河で、墨俣のあたりは海のようにだといわれるほど広く、墨俣湊は中世を通して人や物資の集散地としてにぎわっていた。古代以来軍事的にも極めて重要な地で、渡河地点として船橋もかけられていた。中世東海道のなかでも水陸交通・軍事などの要衝地として格別重要な宿の一つであつた。<sup>(25)</sup>しかし何故『をくり』が語られ読まれている近世のごく初期に、こうした場所に小栗が祀られているのか。単にここが交通の要衝地であるとか、青墓同様遊女がいたといつた一般的な説明だけで納得できるものではなく、より深くこの地固有の歴史と関係させてその理由を探っていかねばならないだろう。妻照手も墨俣から十八町西側の結という場に祀られたというが、これまた同様である。

そもそも墨俣にしても結にしても、どちらにもこの時期より前にすでに名の知られた古社があつた。墨俣には墨俣神社があり、それとは別に正八幡宮を称する荒方神社もあつたし、<sup>(26)</sup>結の町屋地区には鎌倉時代の文学にも書きとめられている結ぶの神があつた。<sup>(27)</sup>ということは、小栗を祀る「正八幡あら人神」、照手を祀る「契り結ぶの神」は、ともにそれら古社の境内地のどこかに小さな場所を借りて祀られた新興の流行神的なものだった可能性がある。

墨俣や垂井などともと中世東海道の線上にあつたが、戦国期には政治的混乱によつて旅行者には避けられ、宿としての利用度は極端に落ちていたらしい。<sup>(28)</sup>しかし信長が尾張・美濃を統一したところからは回復し、宿駅の制度も整い出したようである。関ヶ原の戦いの後、家康はさらにこの地を重視し、慶長五年（一六〇〇）には美濃路を開いて

協往還とした<sup>(26)</sup>。伊勢国を經由する東海道の宿駅制が開設される前年のことである。墨俣はその宿の一つであり、結はその通過線上にある。こうした当地固有の交通上の大きな変化なども、必ずや小栗・照手がこの地に祀られることと関わっているに違いない。

もう一つ注目しておかねばならないことは、この辺り一帯は大河の集中にともなう洪水の常襲地帯であり、墨俣・結はいわゆる輪中として水防共同体を形成していたことである。輪中は近世初期に存在が明らかになるといわれているが、すでに鎌倉時代から高い堤防に囲まれて生活していたというから、この地には災害に立ち向かう地域同士の特別な関係も見られたのである。これが小栗や照手が当地方に祀られることとどう関わるのかは今はまだ不明としかいいようがないが、こうしたことにも関心を払いながら、当地がこの時代に負った固有の課題の面から問題解決に向かうことが大事だろう。説経『をくり』の物語を考えるのに、既知の知識だけで説明し尽くそうとする時代は過ぎた。より多様な観点を導入し、新たな史実をも発掘しながら、正解にせまっていくなさきと考える。

## 註

- (1) 広末保『説経『小栗判官』——漂泊の物語』(『漂泊の物語』) 平凡社 一九八八年七月)
- (2) 荒木繁「『小栗判官』おぼえがき」(『近藤忠義教授還暦記念論文集』『日本文学古典新論』) 河出書房新社 一九六二年十二月)
- (3) 多数あるが、その代表的なものは福田晃「小栗照手譚の生成」(『國學院雑誌』第六十六卷十一号 一九六五年十一月)、同「小栗」語りの発生——馬の家の物語をめぐる——」(『中世語り物文芸』——その系譜と展開——) 三弥井書店 一九七一年五月)
- (4) 広末保『説経『小栗判官』——漂泊の物語』
- (5) 横山重編『説経正本集』第一 角川書店 一九六八年二月、荒木繁・山本吉左右編注『説経節』東洋文庫 平凡社 一九七三年十一月、室木弥太郎校注『説経集』新潮日本古典集成 新潮社 一九七七年一月、信多純一・阪口弘之校注『古浄瑠璃説経集』新日本古典文学大系 岩波書店 一九九九年十二月

- (6) 横山重編『説経正本集』第二 角川書店 一九六八年五月
- (7) 横山重編『説経正本集』第二 角川書店 一九六八年五月
- (8) 『説経正本集』の「附録解題」では「寛永後期——明暦ごろ」としているが、松本彩は絵巻を精査した結果、寛永年間との見解を出している。「絵巻『をくり』——作品の概要と特徴など——」(『をくり』——伝岩佐又兵衛の小栗判官絵巻——)三の丸尚蔵館展覧会図録NO8 宮内庁三の丸尚蔵館一九九五年七月)
- (9) 『説経節』東洋文庫の注一〇六・一〇七では「明堂聖」の字を宛て、当麻道場二十七世明堂智光の可能性を指摘している。
- (10) 荒木繁「小栗判官」おぼえがき
- (11) 横山については「武蔵相模両国の郡代」「武蔵相模両国の殿原」「武蔵相模七千余騎」というように武蔵・相模両国が出て来るが、これは横山の支配圏(権限の及ぶ範囲)を表しており、説経『をくり』における横山の住居は「相模国横山の館」「相模の国横山殿の一人姫」とあるので相模ということになる。
- (12) 『説経正本集』第一、第二「附録解題」で横山重がそれらの関係を説いている。細かい異同はあるが、大筋において本論と差はない。
- (13) ちなみにcの『奈良絵本おくり』で照手が相模川に沈められるところは、二つの点で問題がある。一つ目は「武蔵国相模川おりからが淵」に沈められたことになっている点。相模川と武蔵国の位置関係が正確につかまれている点。二つ目は、照手を乗せた舟が相模川に突き出され「沖」に進んだ後、いつの間にか「ゆられ流されゆくほどに六浦が浦」に吹き上げられる。そこで浦の漁師から浦君の大夫に渡され、さらに大夫の妻によって人買いに売られることになっている点。相模川と六浦の地理的位置関係は、舟で移動すると、相模川↓相模湾↓三浦半島南端↓浦賀水道↓東京湾↓六浦(現横浜市金沢区六浦町)となる。ところがcの『奈良絵本おくり』では相模川から流れ出して、唐突に三浦半島の反対側六浦に着くことになる。しかも六浦は漁村の扱いである。六浦が実態からは速く、リアリティに欠ける。
- これに対してaの「絵巻をくり」では「相模川おりからが淵(場所未詳)」から流れ出して「ゆきとせが浦(場所未詳)」に流れ着き、ここで漁師から村君の大夫に渡される。この「ゆきとせが浦」という漁村を一つ媒介させることで話は無理なくスムーズに展開する。ここで大夫の妻が六浦の浦の商人に照手を売ろうと企て実行するが、六浦はまさに人買い商人も活動する有力な港町であった。こうして相模川の淵(おりからが淵)↓海辺の漁村(ゆきとせが浦)↓商人集住の港町(六浦が浦)と照手が移動する行程にもリアリティが出てくることとなる。六浦の理解が正確である。
- (14) 説経説きが改編することや北野社において説経が語られていた点については、徳田和夫「説経説きと初期説経節の構造」(『国文学研究資料館紀要』第二号 一九七六年三月)
- (15) 『藤沢市史』第四巻通史編 一九七二年三月、『同』第五巻通史編 一九七四年十月、橋俊道「遊行寺 中世の時宗絵本山」藤沢文庫 名著出

版 一九七八年十二月

- (16) 『説経節』東洋文庫 注七〇にも考証がある。
- (17) 徳江元正「土車」の周辺(『國學院雜誌』一九六一年十月)、「続『土車』の周辺」(『日本文学論究』第二十三冊 一九六三年十二月)、河野勝行「障害者の中世」文理閣 一九八七年八月、金井清光「一遍の天王寺賦算と乞食」(砂川博編『一遍聖絵の総合的研究』岩田書院 二〇〇二年五月)
- (18) 大阪市立博物館編『社寺参詣曼荼羅』平凡社 一九八七年十二月
- (19) 第十二巻 美濃青墓に着く直前「おいそぎあればほどもなく、土の車をたれもただ引くとは思わねど、施行車のことなれば」とある。
- (20) 第十巻の最後、第十二巻熱田の宮、第十三巻上り大津からの出発場面
- (21) 「をくり」伝岩佐又兵衛の小栗判官絵巻」には、第十一巻第四段の小栗発見から同第五段、第十一巻第七段、同第十二段、同第十八段、同第十九段の絵が掲載されているが、いずれも僧は七人構成と認められる。筆者は原本にあたって確認することはしていないが、これらの場面でいずれも七人の僧が確認できることから、本文のように推測した。
- (22) 瀬田勝哉「増補洛中洛外の群像——失われた中世京都へ」平凡社ライブラリー 二〇〇九年一月
- (23) 福田晃「小栗照手譚の生成」にすでにこの言葉は出ている。
- (24) 馬場光子「青墓考」(『梁塵』一五号 一九九七年十二月)、沖本幸子「今様の時代 変容する宮廷芸能」東京大学出版会 二〇〇六年二月
- (25) 豊永聡美「中世における遊女の長者について」(安田元久先生退任記念論文刊行委員会編『中世日本の諸相 下巻』吉川弘文館 一九八九年四月)
- (26) 榎原雅治「中世の東海道をゆく 京から鎌倉へ 旅路の風景」中公新書 中央公論新社 二〇〇八年四月
- (27) 『大垣市史 青墓篇』一九七七年十一月
- (28) 『岐阜県の地名』日本歴史地名大系21「青墓宿」の項、『岐阜県史 史料編 古代・中世』揖斐郡市田靖氏所蔵文書
- (29) 大垣市史 青墓篇」に収載された円興寺の過去帳の分析が欠かせない。
- (30) 荒木繁「田村伝説と説経『小栗判官』」(『國語と國文学』昭和五十年十月特集号 日本の劇文学 一九七五年十月)
- (31) 福田晃「小栗照手譚の生成」
- (32) 木村見子「鎌倉大草紙」から御物絵巻「をくり」へ——小栗譚の発生と形成——(『日本語と日本文学』(筑波大学) 二〇一九九四年)は、このような通説に批判的な数少ない研究である。
- (33) 『国史大辞典』「遊行上人」の項(今井雅晴執筆)、「清浄光寺」の項(橋俊道執筆)『日本史大事典』「遊行上人」の項(大隅和雄執筆)からま

とめた。

- (33) 望月華山編『時衆年表』角川書店 一九七〇年一月。
- (34) 橋俊道『時宗史論考』法蔵館 一九七五年三月 所収の諸論文によった。
- (35) 『小栗氏と小栗伝説 小栗判官と照手姫の世界』(茨城県 協和町教育委員会 一九九〇年三月)
- (36) 橋俊道・圭室文雄編『庶民信仰の源流——時宗と遊行聖——』名著出版 一九八二年六月に翻刻されている。
- (37) 橋俊道『遊行寺 中世の時宗総本山』
- (38) 橋俊道『藤沢山の焼亡とその再興』(『時宗史論考』)
- (39) 『清浄光寺文書』二二四、二二五 直江兼統判物(高野修編『白金叢書時宗中世文書史料集』白金叢書刊行会 一九九一年五月)
- (40) 『日本古典文学大辞典』六「結城戰場物語」の項(和田英道執筆)
- (41) 『日本古典文学大辞典』二「鎌倉大草紙」の項(加美宏執筆)
- (42) 和辻哲郎「小栗判官」(『日本芸術史研究(歌舞伎と探り浄瑠璃)』岩波書店 一九五五年三月)
- (43) 福田晃「小栗照手譚の生成」で和辻説に異論を唱えた。これについては註(45)で関説する。
- (44) 網野善彦『増補無縁・公界・楽』平凡社ライブラリー 一九九六年六月、横田光雄「説経と寺社のアジュール」(『国史学』一三一(一九八七))
- (45) 木村晃子『鎌倉大草紙』から御物絵巻『をくり』へ——小栗譚の発生と形成——は福田晃を批判している。私も三河小栗氏が先祖の由来を説く先祖語りだという点では木村氏に同意する。
- (46) この点について、福田晃の説(「小栗照手譚の生成」)に触れておく必要がある。まず和辻哲郎は、説経『をくり』は『鎌倉大草紙』の逸話部分を踏まえて、そこによみがえりの話など超歴史的なものが付け加わって成立したと考えた。福田はこれを批判して次のように主張する。むしろ民間流布の小栗説話がまずあり、それが清浄光寺に運びこまれる。そこで「黄泉帰りの」語り部分などが加わり、この物語が飛躍的に成長、発展する。『鎌倉大草紙』はそうしてできた話の中から荒唐無稽とも思われる蘇生部分が省略され、「歴史化」されたものである。したがって『鎌倉大草紙』の成立は小栗よみがえり譚より後と考えた。

福田説を整理して単純化することはなほ難しいのだが、いちおうこのような流れだとすると、中世後半戦国期、清浄光寺で小栗よみがえり譚は成立し、そこで管理されていたことになる。福田のこのような理解には研究者の間で一定の支持もあるようだが(広末も留保しながらも賛同している)、私は賛成できない。なぜなら証明すべきものを先取りして根拠にし、そこから他を判断するという倒錯に陥っているからだ。つまり「中世の清浄光寺で小栗よみがえりの話が成立した」というそれ自体証明すべきことが動かぬ前提にされてしまい、よみがえり部分のない『鎌倉大草紙』は、その話から非歴史的で荒唐無稽に見える部分を切り捨て「歴史化」された、と解釈してしまうからである。これは史料を

扱う方法として納得できるものではない。

- (47) 『小田原衆所領役帳』寺領の部(橘俊道「藤沢山の焼亡とその再興」)
- (48) 橘俊道「藤沢山の焼亡とその再興」
- (49) 橘俊道「藤沢の客寮について」(『時宗史論考』、同『遊行寺 中世の時宗総本山』、柴裕之「後北条氏と藤沢」(『藤沢市史研究』39 二〇〇六年三月)
- (50) 大橋俊雄「江戸初期における清浄光寺の再建について——遊行三十二代普光の行動を中心として——」(藤沢市中央図書館編『わが住む里』Vol No 23、一九七一年。橘俊道「藤沢山の焼亡とその再興」)
- (51) 橘俊道「藤沢山の焼亡とその再興」
- (52) この道場造営に関する文書については「清浄光寺文書」一二三(『白金叢書時宗中世文書史料集』)では「北条氏直判物」ではなく「佐竹義重判物」となっている。今井雅晴は「時宗文書にみる「藤沢」」(『藤沢市史研究』13 一九七九年十二月)でこの文書を写真入りで紹介し、これを北条氏直の判物として北条領国内での再建のこととした。ところが、「相模と常陸の時衆本山」藤沢」(『一遍と中世の時衆』大蔵出版 二〇〇〇年三月)ではこの点を改め、佐竹義重判物とし、佐竹氏領内での道場建設史料と断じた。これに従えば天正十五年に相模藤沢の再建問題は史料的に確認できないことになる。
- (53) 普光の水戸・常陸における活動については今井雅晴の研究に負うところが大きい。「水戸神応寺と時宗・遊行三十二代他阿普光」(『茨城県史研究』40 一九七九年二月)、「相模と常陸の時衆本山」藤沢」
- (54) 『藤沢市史研究』14 一九八〇年十二月に翻刻され、橘俊道の解説が付されている。
- (55) 大橋俊雄「江戸初期における清浄光寺の再建について——遊行三十二代普光の行動を中心として——」
- (56) 『藤沢市史』第五巻通史編 東海道と藤沢宿
- (57) 松尾剛次「説経節『小栗判官』成立再考」(第24回国際日本文学研究会集談録『境界と日本文学——画像と言語表現——』二〇〇〇年十一月)は復興勸進が物語の成長のきつかけになったことを想定し、それを第八代藤沢上人太空の時としている。ただし氏のように復興勸進を大前提とした上で時期、人物探しをするという方法には賛成できない。
- (58) 東条・玉造の御所について、東条は信太郎、玉造は行方郡で、小栗氏の本拠のある小栗保(真壁郡・新治郡)からは遠く離れている。
- (59) 大橋俊雄「江戸初期における清浄光寺の再建について——遊行三十二代普光の行動を中心として——」、今井雅晴「水戸神応寺と時宗・遊行三十二代他阿普光」
- (60) 『金光寺文書(旧七条道場)』五四六 遊行三十二代普光上人書状(『白金叢書時宗中世文書史料集』)、橘俊道「藤沢山の焼亡とその再興」

- (61) 「金光寺文書」五四五 遊行三十二代普光上人書状(『白金叢書時宗中世文書史料集』今井雅晴「水戸神応寺と時宗・遊行三十二代他阿普光」)
- (62) 橋俊道「藤沢山の焼亡とその再興」
- (63) 『大谷学報』vol.52(1)に橋俊道の翻刻と解説が載せられている。橋俊道「三十一代同念の遊行について」(『時宗史論考』)
- (64) 「金光寺文書」五二六 遊行二代真教上人書状以下、五二七、五二八、五二九、五三〇、五三一、五三三の文書に、この年普光が文書修理をした時の極め書が入っていることから、天正十四年三月、四月の在京が確認できる。(橋俊道「藤沢山の焼亡とその再興」)
- (65) 水戸に「藤沢道場」(後の神応寺)を造り十数年にわたって止住したということは、相当数の門弟集団を抱えていたということになる。
- (66) 例えば「閑吟集」に「引くもの尽くし」が歌われている。又読み物の世界にも広がっていたことは「乳母の草紙」(『室町物語集下』新日本古典文学大系)にも「引くもの尽くし」があることからわかる。
- (67) 大谷晃子「女性の恩愛の力と死者の蘇生——御物絵巻『をくり』に見る愛と死——」(今井雅晴編『中世仏教の展開とその基盤』大蔵出版二〇〇二年七月)は特にその点を強調している。
- (68) 平成二十一年十月開催された東京国立博物館の特別展「皇室の名宝——日本美の華」には『小栗判官絵巻』が展示されたが、作者は「岩佐又兵衛」と断定的に書かれている。
- (69) 辻惟雄「岩佐又兵衛 浮世絵をつくった男の謎」文春新書 二〇〇八年四月
- (70) 福田晃「小栗照手譚の生成」に代表される。
- (71) 榎原雅治『中世の東海道をゆく 京から鎌倉へ 旅路の風景』
- (72) 『墨俣町史』岐阜県安八郡墨俣町役場 一九五六年六月、『岐阜県の地名』「墨俣町」の項、榎原雅治『中世の東海道をゆく 京から鎌倉へ 旅路の風景』
- (73) 『式内社調査報告』第十三巻東山道2 「美濃国安八郡荒方神社」の項
- (74) 『安八町史』通史編 安八町 一九七五年十月
- (75) 榎原雅治『中世の東海道をゆく 京から鎌倉へ 旅路の風景』
- (76) 林英夫「近世美濃路の成立」(『郷土文化』第二巻第四号 一九四七年九月)
- (77) 『安八町史』『墨俣町史』榎原雅治『中世の東海道をゆく 京から鎌倉へ 旅路の風景』

付記

宮本さんの追悼号に私が論文を書くことになろうなどは、思ってもみなかったことです。初めてお会いし、武蔵に来ていただけないかとお願ひした時から四半世紀、どれだけ私の無理難題につき合い助けていただいたことか。数えあげればきりがありません。民俗学のことでも、わからないことがあれば気軽に研究室に訪ねて行っていろいろ教えていただきました。学生の卒論の口述試験でごいっしょすることも多く、質疑応答からもうっぱい学ばせていただきました。耳学問をするとはまさにこのことです。こういう楽しい機会を永遠に持てなくなつたことはあまりにも寂しく、悔しい思いでいっぱいです。宮本さん、ほんとうにありがとうございました。

この論文は平成二十年十二月、慶應義塾中世文学研究会で発表したものもとになっています。当日、多くの方々から貴重なご意見、ご批判をいただきました。本稿は満足ではありませんが、それらに対するいちおうの解答のつもりで書いたものです。この機会に、記して深く感謝の気持ちを表したいと思ひます。